

基調講演

「学校における教育相談のあり方―話の聴き方―」

講師：鳴門教育大学学長補佐
山下 一夫

【山下】山下です。よろしくお願いします。

本日、追手門学院大学に呼んでいただきまして、非常に楽しみにしておりましたことが二つありまして、一つは内輪のことですが、先輩や同僚に久しぶりに会えるということで喜んで来ました。

それから、もう一つは、宮本輝さんの出身校ということで一まさにこのホールがそのようですけども『泥の河』という映画を見て大変感動しまして。先に小説を読んでから映画ではなくて、映画を見てから小説を読みました。非常に懐かしいのは、映画で、最近の若い子は下着かどうかわからないような格好で歩いている子がいるということですが、全く別の意味で『泥の河』を思い出していました。私が幼稚園のころ、あるいは、小学校の低学年のころ、夏になるとランニング姿でキャンディーを食べながらそのあたりを歩いていたな、という大変懐かしいものを思い出しました。

それから、本日来させていただいて非常に感動したのは、やはり建物の美しさといえますか、文化を感じることでですね。単にきれいというだけではなくて、追手門学院大学の建物の美しさはすごいなということ。古墳があったり、それから松下幸之助さんが寄贈した茶室があって、そしてこの斬新な建物があって、というようなことです。「環境は無言の教育である」と鳴門教育大学の初代の学長はよく言っていました。少し脱線しますが、鳴門教育大は日本一美しい国立大学であると思

うのですが、本当にその美しさが実は子供たちあるいは教員にとっても非常にいい影響を与えるんだ、ということを鳴門教育大学の初代の前田学長は言っていました。ああ、追手門学院大学もそうだな、という気がいたしました。

それと、もう一つ、文化を感じるのは、藤原鎌足のころの古墳です。明治政府のとき、当初大阪府は阪神と摂津、この広い範囲で大阪府を建てようとしたそうですね。ちょうど我が阪神タイガースがもうそのまま一つになって、神戸から茨木、高槻、そして大阪の南部まで含んで大阪府として建てようとしたそうで、名前も大阪府か摂津府か、そのような話が出ていたと聞きますが、余りにも力が強過ぎて東京に対抗するというので、神戸を切ったと聞いています。もし摂津府、または、大阪府として、このままいっていただろうな、と。私は大阪生まれですから、そのような昔のことを思いながら、追手門学院大学の建物、景色を見させていただきました。

関係ないことをつらつら申しましたが、本題に入っていきたいと思います。

まず井上先生から略歴を言っていたいただきましたが、簡単にもう1回言いますと、今から30年ほど前に大学院に入り、そこでカウンセリングを始めました。そのときに、不登校のお子さんや保護者の方と会い、正直に言って、学校の先生というのは何て理解がないんだろう、というようなことを思いました。どうし

て子供の心を傷つけるようなことを言ったり、保護者の気持ちに寄り添えないんだ、と書いていました。ちょうど20年前に鳴門教育大学に着任しまして—もう皆さんご存じで来られた方もいると思うのですが—学校の先生の2年間の再研修、大学院でも一回りフレッシュしてもらうためにできた大学院で、兵庫教育大、上越教育大、そして鳴門教育大、三校が現場の先生の再教育のための大学院として20年以上前にできたわけです。

私も着任して、「あっ、学校の先生は非常によくやっておられるんだ」ということがわかりました。不登校になりかけのところで先生方が非常によくやっておられるから不登校にならず、または、問題行動にならない。非常によくやっておられる。それでもうまくいわずに、保護者と学校が、あるいは、子供がかみ合わずに不登校になったお子さんに対して私達はカウンセリングをしていたんだ、ということがわかりました。学校の先生が非常に努力されていて、初期段階で生徒指導、教育相談をよくやっておられるのを知らずに、不登校が長期化しているお子さんたち、あるいは、保護者の方だけを今まで面接していたんだな、と反省を抱きました。長期化しても学校の先生がいろいろ関わってよくなっていった事例も知るようになった、ということです。

スクールカウンセラーが一番最初に導入されたときから、私もスクールカウンセラーとして学校現場に実際行くようになりました。もう一つ、自分自身勉強になったのは何かというと、中学校はこんなに忙しいのか、中学校の先生は大変だな、ということを思いました。もともと鳴門教育大学にいますから自分ではわかっているつもりでいたのですが、学校の大変さや忙しさ、それから先生方がよく関わっておられるということを実感した、というような感じでした。

いろいろ思い出深いのですが、一番最初に

行った学校で10時ごろでしたか、茶髪、金髪、青髪の子がグラウンドで集まっていた、「何やろ、あの子らは」と書いていたら、「未確認飛行物体発見！」と言うんですね。「何のことやろ」と思ったら彼らが走ってくるんですね。「あっ、UFOって僕のことか」と。彼らにしたら、「何や、こいつは」と走ってくるわけですね。やはり、中学生でも数人、しかも青髪、茶髪、金髪だと怖いですよ、学校でも。彼らがワッと来て、「何や」と思いましたが、ここはやはりご挨拶しておかなければと思い、「今度来たスクールカウンセラーの山下です」と言うと、「うん」と言って、またビューッと走っていきました。

初めは「えっ」と驚きましたが、後で彼らと時々話すと、構ってほしいというのがすごくあるんです。ただ、こちらも早々どう構っていいのか、彼らの要求は大変なところになっていきますから、ほどほどの構い方で何とか彼らとは関係していきました。

今でもよく覚えていますのは、これは別の中学校ですけど、スクールカウンセラーとして6時ごろまでずっと面接をしていて職員室に戻ったとき、職員室にちょうど一報が入るんです。何かといいますと、金髪の暴走族風の10人ばかりの若者が体育館の裏で集まっている、という一報が入るんですね。「それは一大事や」ということで先生方がワッと行かれる。イギリスの教育省—文部科学省ですけども—生徒指導の本を出して、生徒指導はもうできるだけ1人で行動してはいけない、と書いてあるんです。まさにそんなときに「よし、おれが1人で行ってやる」というのはもう絶対だめですよ。トラブルのもとですので、何人かの先生方が集団で行く。生徒指導の先生、教頭先生や女性の先生も7、8人で行く。私もついていきました。

本当にもう金髪です、今度は。金髪の暴走族、5、6台でしょうか、何台か大きいバイクがあって、男の子と女の子がいわゆるうん

こ座りをしてにらみついているんですね。私もそれを見て、「わあ、この子らどうすんのやろ、学校の先生方は。これも勉強や」と思いました。

一番先頭に立っておられるのは、熱血生徒指導の先生です。どのような先生かと言うと、学校じゅう聞こえるのではないかというぐらい大きな声で「何してるんだあ！」と大声で言う。しかし、人気があるんですよ、その先生。「何でこの先生はあれだけパーッとしかるのに人気あるんやろなあ」と私は思って見ていましたら、一つはとにかく短い、しかるのが。ねちねち、ねちねち、「君ねえ、あれねえ、こうねえ、それでねえ」あるいは「おまえの人格が」「おまえが」ということは言われないんですよ。短くもう「それはだめだ」というようなことをぱっと言われる。「あ、これは一つやな」と。

もう一つは何かというと、ふだんから声かけをよくされていますね。「何々どうや？こうや」とか「どうした？」とか。しかるだけではなくて普段から声かけをよくやっているな、と。

それから、もう一つ、しかり方でおもしろかったのは、その先生はラグビーもサッカーもやっておられるんですが、少し小柄なんですよね。それで、生徒をしかるときは必ず座らせてしかるというようなことをされるわけです。「先生、どうして座らせてやるんですか、しかるときは」と聞くと、「ちょっとそこに間ができて余裕ができて、そして『何してるんだ』とパーッと怒って、はい、それで、というようなことができるからいいんです」と言われて、ああそうかと思いましたが、私は少し人間が悪いからもう一つあるのではないかと。その先生は、背が低いですからね。中学校ぐらいになると、もう170、175、180cmの子がいて、「何してるんだ、おまえは」と言っても迫力がないため座らせているのかな、と思って聞いたのですが、「そんな

ことありません」と否定されました。そのような先生が先頭に立って行くわけです。

そのときに、暴走族の子が今言ったようにだらしなな格好でしゃがんでいて、火花が飛び散っているわけです。まずネクタイを取られたら負けですから、私はネクタイをそっと外してポケットに入れて、それでこう見て、「あ、この子とこの子は乱闘になっても勝てるな。この子は危ないな」とか「では、もう少しこっちにいてようか」とか後ろからこそそそ行っていました。

生徒指導の先生はどうされたと思いますか？私はもうてっきり、「おまえたち、何してるんだ。ここは中学校でおまえたちの来るところと違う。出ていけ」のように言われると思っていたんです。それで一波乱起こるのですが、その生徒指導の先生が何をされたかということ、「あ、うちの中学校の出身やろ。あなたもそうやろ。あなたも」と。「名前はちゃんと覚えてない、申しわけないけども、顔は覚えてるわ」と話しかけられるんです、最初に。そうすると、向こうも、「何言われるんや」と構えていたのが、「え、顔を知ってる」と、何か少しがくっときたというのか。それでも火花は散っています、まだ、にらみ合っているというか、向こうはにらんでいます。

次に何をしたのかということ、その生徒指導の先生は、いわゆるうんこ座りしている子の横にその先生も座って、「どうしたんや」とぼそぼそと語りかけるんです。それと同時に、教頭先生から女性の先生もみんな中に入って横になって座って、目線を一緒にして「どうしたん？」というようなことをぼそぼそとと言う。

つくづく思いました、「スクールカウンセラーがあかん」というよりも、「スクールカウンセラーである私があかん」でしたね。その輪の中にとっても入っていきませんでした、正直。ですので、少し遠くから眺めていて、

先生方がぼそぼそ、ぼそぼそと話しかけられてるのを見ているだけという、ちょっと情けないですけども。そして、5分、10分ぐらいして先生が立ち上がらせて、「もう来るなよな」と言って追い出しました。実に手際がいいというか、すごいなあ、と感心しました。押し返すのもすごいなあ、と私は思ったんですね。

ある中学校では、やはり暴走族の若者がやってきて、それで校長先生が「君たち修了生やね。話しよう」と言って校長室で話を聞いて、そこまではよかったんです。そこから「何か悩み事があったらいつでも来いよな」と言ったがために、その中学校、1年間荒れ放題。暴走族の若者がブーンと来て、「とにかく校長に会わせろ」とか、「校長、いいひんのか」と言っただけでバイク乗り放題のような状態。

ですので、自分のできる範囲というのか、押したり引いたり一生徒指導の先生は原則押ししたり引いたりでしょうし、養護教諭やスクールカウンセラーは引いたり押ししたりだと思いますね—その辺、両方とも大事。押ししたり引いたりする人と、引いたり押ししたりする人がいてうまくいきますし、自分の中でも場合場合によって、今の生徒指導の先生のように、「あ、ここはうまく引いて、そして押すんや」ということ、その辺が学校の先生はうまいなあ、と感じました。

学者はついそれに理屈を後でつけていくのですけど—理屈は『生徒指導の知と心』という本に書いてありますから、読んでもらえたらと思います—とにかく大学の教員は理屈を後でつけるものですが、学校の先生方はまさにそれを実践されていると思います。

言いたいのは、教育相談でとか—本日のテーマでは「あり方」ということですけども—学校の先生は「相談室で会いましょう」だけではなくて、そのような力量を身につけておられて、それが授業のとき、学校にいると

き、いろいろなところで発揮されるのだということだと思います。ですので、一対一で呼んできてという場合もあるでしょうけども、力量の一つとして、今言ったような引いたり押ししたりのようなどころができたらなあ、ということですよ。

本日は、そういうことで話していきたいなと思うんです。まず最初に、資料の「ドラえもんといじめ」、これは私がスクールカウンセラーに行っているときに子供たちに配ったものです。テレビのドラえもん、あれは私は「いじめや」と思っています。いじめ番組。映画になると、ジャイアンも急にいいやつになって、のび太も急に根性を見せてなかなかなのですけれども。ただし、最近のドラえもんはよくなってきて、いじめ具合が減っていますが、昔のドラえもんは本当にいじめ。クレヨンしんちゃんもそうですね。クレヨンしんちゃんのみさえさん、昔、げんこつでどんどんやっていたけど、みさえさんも成長して、体罰、暴力はすごく減っています。あるいは、しんちゃんもかなりいい子になってきています。

このような資料を配って自己紹介ですね、「スクールカウンセラーの山下です」というようなこと。本日はこれは取り上げません。

本日は、むしろ今話題になっている保護者との連携という問題に絡ませて、カウンセリングマインドについて話していけたらなあ、と思います。

まず1番目、「モンスター」という言葉です。「モンスターペアレント」やモンスター何々だとかよく言われますが、非常に危険な言葉だと思いますね、「モンスター」という言葉は。日本人は「モンスター」という言葉にあまり差別意識がないのかもしれませんが、アメリカでは大問題になったというのが、この資料に書いています。昨年3月ごろの話です。「話の聴き方」、一枚物ですけども、裏表。サマンサ・パワーさんを覚えておられますかね。

サマンサというと「奥さまは魔女」のようで、その親戚ですごい魔女のようですがそんなことはなくて、どのような人かというと、ハーバード大学の教授で、人権問題を専門にしているピューリッツァー賞も取ったというすごい経歴の、しかも人権に理解のある、それでオバマ陣営の外交問題の専門スタッフだった女性です。その人がずっと選挙戦をやっている、なかなかヒラリーさんがおられない。ついポロッと「もうヒラリーはモンスターだ。もう非常にタフで手ごわい」ということを言ったのですが、その言葉がとらえられて差別用語だ、侮辱する言葉だ、と追及されました。結局、非常に人権問題で権威のある女性の教授がオバマ陣営からも引き下がって一件落着きました。

要は何かというと、一方ではタフだというような意味で、決してサマンサさんはヒラリーさんが本当に怪物だとか何だとかおとしめる意味で言ったのではないと思うのですが、タフだということでもやはり相手を傷つけることがある。少し揚げ足取りのような気もしますけども、そのようなこともあるんだということですね。

そして、学校の教師が「モンスターペアレント」という言葉を使うのは、私は非常に危険なことだと思います。ただし、保護者のいろいろな要求やいろいろなタイプについて、勉強して対応を考えていくことは大事です。危機管理でいろいろ。ただ、それを「モンスターだ」と言うのは、結局レッテル張りになって、保護者の正当な要求に対しても「もううるさいな」と言うようなこと、すぐに「モンスターだ」と言うようなこと。保護者にしたなら、子供のことが心配で、先生のところいろいろなことで相談に行っても、「ああ、また来たわ」とレッテル張りをされたらたまったものではないということです。むしろ言いに来てくれる保護者のほうがありがたい、連携をとっていけるわけですから。対して、

子供のことも家庭と協力して連携をとってやっていきたいのに、何も反応がない保護者の方のほうが学校としてはつらいと思います。

大阪大学の先生は「いちゃもん」という言い方で一ただ、「いちゃもん」も大阪人ならわかりますが、関東の人にはなかなか「いちゃもん」と言ってもわかりにくいところですが一何か保護者が言ってきたときはむしろチャンスですよ、と言われてますが、まさにそうです。関係をつくっていく。

私がいつもうまく対応しているのかといったらとんでもなくて、私自身が失敗した例を2つ挙げたいと思います。

一つは、私が保護者を怪物にした、モンスターにした例です。

今から20年ほど前の話ですが、ある大学で夏休みに入ったころです。歩いていると急に事務の人が「先生、先生、来て」と言ってきて、「何や」と思ったらある保護者のお父さんが酔っぱらって、「うちの子供に、下宿に何ほ連絡しても通じない。下宿へ行ってきてもいない。どうなってるんだ。大学の教育は何してるんだ」と来られているのです。今なら携帯電話があって「どうしてんのや」で済むでしょうが、20年以上前の話ですから携帯電話もないころで、お父さんはかなり心配して、酔っぱらって、「大学の教育は何してるんだ」と。そのゼミの先生はおられない、学長はおられないということで、「学長を出せ」と言われている。副学長がいるのは私は知ってたんですけどね、副学長は出ずに副学長もいないということで、全く関係ない相談室を担当していた私がたまたまつかまって、「先生、相手してください」と言われました。

それで、お父さんの話を「ああ、そうですか」のように言って聞いていると、お父さんが10分ほどして「大家に電話かける」と言い出すわけですね。大家さんに電話をかけるぐらいならとかけてもらって、それで私が大家さんに「今だれそれさんのお父さんが来られ

て、お子さんのことでちょっと心配されてるんですけども」と言ったら、大激怒。なぜ激怒されたかわかりますか。私の何が悪かったか。「だれそれさんのお父さんが来られて、だれそれさんがおられなくてちょっと心配されてるんです」というその一言がまずかった。何かというと、「ちょっと心配してるとは何事や」と。「おれはもうめちゃうちゃ心配してるんだ」と。「それをおまえ、ちょっととは」と言って、電話の受話器は投げ、その辺のものを壊して大変でした。「もうこんな大学にはいててもしゃあない」と言って出ていきました。事務の方はすごいですね、冷静に証拠の写真としてあちこち撮って、何時何分こんなに暴れましたと記録をとっておられました。

私は後で反省しましたね、そのときすぐに。何かといいますと、ちゃんと聞いていなかった。「大学生にもなって親が出てくるか」と。まずそこからちょっとキレて。こちらも、「何やこの親は、しかも、酔っぱらって来るとは何事や」という思いがあって、表面は「ああそうですね。ご心配ですね」と言っていたけれども、絶対伝わっていたと思いますね、本気で聞いていないというのが。そのとき私は確かに本気で聞いていませんでした。それが大きいミスだったなあ、と反省しました。

周りの事務の人たちは「あの親はほんまひどいですね」と。当時は「モンスター」という言葉がなかったから、とにかく「ひどい」、「ひどい」と言いますが、「私がそのようなひどいことに仕立て上げたんやな」と大変反省しました。

それから、もう一つ、私が怪物として対応された例というのがあります。

私が講演に呼ばれたら一教育の、学校の先生を対象にした大学ですから。大学院はそうですけども、一般の教員養成も大学、大学院で行なっていますので、ぜひ鳴門教大に子供さんを送っていただけたらと思います。先生

方も昔は大阪へたくさん送っていただいたんですけど、財政事情でもうゼロになりまして。休職制度があるので、2年間授業料免除にもなりますから、現職の先生も来ていただけたら一急にCMが入りました。

戻りまして。そのような関係で教育委員会から呼ばれると、大体講演で行くようにしているのですが、ある教育委員会から毎年呼んでいただいていた、ただし遠方なので、朝早く出て昼に講演して夜帰ってくるというのを続けていたんです。担当者がかわって、「先生、来年もお願いします。9時から来てください」と言われて、「え？9時からだったら前泊しなきゃいけないじゃないですか」と。「申し訳ないのですが、大学の教員は暇と思われているかもしれませんが、もう本当に大変忙しくて、中学校の先生と一緒にです。大学に来られたら、『えっ、大学の先生って私たちと一緒にやね』、あるいは『それ以上やね』と言うぐらい忙しいので、前泊では無理です。しかし、何年も行っていますし来年はまた以前のようにお昼に変えてくださいね」と言ってその年は終わったんです。

翌年、またその同じ方から電話がかかってきて、「先生、また9時からお願いします」と。いかに温厚な人のいい私でも一というのもどうかわかりませんが「ええっ！」と絶句してしまいました。「何々さん、去年、こうこうで前泊するのは時間的に苦しいためお昼からに戻すということをお願いして、何々さんもオーケーと言ってくれましたよね」と言うと、向こうも絶句。

それで、こちらは少し正直不機嫌になって、「今年は行きます。でも来年はまたちゃんとお願ひしますよ。戻してくださいよ」と言ってその教育センターへ行ったんです。そうすると、所長自ら、センター長自らお出迎えて、その担当の方はもう来られない。センター長は明らかに、「こいつが文句言いの山下か」のように対応されるわけです。私も大阪生ま

れで大阪人ですから、「やはりこの場の空気を和らげなあかん」と思って少しあほなことを言うのですけども、もう全然通じない。もうあほなことを言えば言うほど、何か自分が惨めになってくる。それで講演して、案の定、きっとブラックリストに載ったのでしょね。もうその教育委員会からは呼ばれなくなってしまいました。

「自分がモンスターにされたら、きっとこんな気分やろうな」と思いました。表面はすごく懇懇なんです。丁寧で、「遠くから来ていただいて…」とか「わざわざ…」と言うのだけれども、明らかに、「ああこいつか」という空気をこちらも感じてしまう。場の空気も非常にかたい、という状態でした。

「聴き方」ということで幾つか覚えておいていただけたらなというちょっとした腕のところ、技法があるんですけども…。

まず、学校の先生は、代表して今、しかられ役や文句のつけられ役になっていることを覚えておいてもらえたら、ということです。カウンセラーはそうです。カウンセリング、あるいは、教育相談は悩み事を聞いてうまくいっていると思われるかもしれませんが、それはごくわずかで、「何で先生、1週間に1回しか会ってくれないんですか」とか「先生は…」というようなことがよくあります。それから、それは夫に言うべきことをカウンセラーに言ってくるとかね。それらに対して、代表して、「あ、自分は今、かたき役してんねんなあ」ということ。カウンセラーはそれを勉強しているわけですが、そのようなネガティブなものに対してどう受けとめてどう対応するのか。

学校の先生方、力量のある生徒指導の先生や教育相談は、「あ、私が代表してしかられ役をやってんねんな」と受け入れられるのですが、若い先生は、「何で言われなあかんねん」と。けんかをしてしまうことも。そうならないように、というのが、この資

料に書いてある「心の振り子」です。

どのようなことかということ、人間の攻撃性というのは、ちょうど振り子のようなもので、その図で書いてあります。人間は攻撃性があるって、それが内に行ったり外に行ったり。外に行っただれそれはと少し文句を言ったり、あるいは、自分で「ああ、言い過ぎたなあ」と反省したり、それを人間は適度にやっているということです。ですから、攻撃性のない人はまずいない。ただ、夫婦でお互い攻撃性を向け合ったらまずいので、テレビに向かって「あの俳優の演技、下手やね」、「何とかやね」と。最近少し言い過ぎたかと反省していますが、オリンピックのときは星野監督に対して、夫婦して「星野、何してんねん」などと夫婦で言うんです。そのようにやっていると、仲がまあまあうまくいのですが、最近は「星野監督に言い過ぎたかな」とかね、このように適度な揺れでいってるわけです。

対して、保護者の中で、あるいは、子供もそうですけども、これが内側に向いて一気に出てきたときにすごい攻撃性が出てくる。しかも、その攻撃性が教師に向かって出てくるのがよくあります。今言いましたように、代表してしかられ役、文句言われ役をするわけですから。そのときにすぐに反論してしまうと、ぐしゃぐしゃになってしまう。保護者やその子の気持ち、言い分をまず聞くということ。

例えば、お母さんですと「どうしてうちの子だけがこう学校へ行けてないんやろか」、「うちの子だけが」と。実はうちの子だけではないのですが、うちの子だけと思われまもんね。あるいは、周りから「おまえの育て方が悪いんだ」と言われていたり。ですので、わあっと攻撃性が出る時は、その前に物すごく内側に攻撃性を向けていることを思いやってほしいのです。「ああ、このお母さん、すごい自分を責めてはんねんな」、「つらいんやろな。だからこそ、今わあっと感情が出て

きてんねんな」と。

話を聞く、ただし、大事なのは言いなりにはならない、ということです。これは全く違いますよね。話は聞くけれど、あれしろこれしろと言われても、到底できないようなこと、大家さんに電話をかけることなどはすぐできるのでやればいいですけども、「誰それちゃんのクラスからもうよそにやらしてください」など、それはちょっと、というようなこと。そのようなときは、とにかく話、要は感情を一生懸命聞くということです。感情を聞くけれど、言いなりにはならない。「それは大事な問題ですから、また帰って管理職とも校長とも相談させていただきます」と。

そうするとどうなるか、話を一生懸命聞くと親も戻ってきて、「この前、先生言い過ぎました」とか「先生、よう聞いてくれた。ちょっとこっちも言い過ぎた」ということを言われます。振り子をイメージしながら聞いていただけたら。変なところで横槍を入れたり反論しないということ。

次に、「簡単受容」と言われていますが、これが非常に難しいです。ここがプロのカウンセラーの腕の見せどころ。見せどころというか、訓練するところですが、要は相手の気持ちに寄り添うことは簡単なようであって非常に難しいということです。

すなわち、話を聞く、感情を聞くと言いましたけれど、そのときに頭で聞いているとやはりいけないようなのです。科学的には、脳がすべて感情であるとか、考えがざっとあると言いますが、臨床的に言ったら「感じる」とか、「考える」。特に「感じる」というのは、私達は心臓がドキドキするとか、あるいは、おなかが減ってとても腹が立ってくるとか、あるいは逆に、おなかが満ち足りてよく聞けるとか、あるいは、体全体で何か感じたりというようなことがあると思うんです。それを臨床の場では大事にしましょう、教育相談では大事にしましょう、ということです。科学

的には脳かもしれないけれども、いろいろなところを使って人の話を聞きましょう。そして、まず大事なのは何かというと、やはり心臓です。心臓を相手の心臓に重ね合わせるようにしてイメージして聞くと、こちらも相手の気持ちが変わってくるし、相手も「あ、この人本気で聞いてくれてる」となります。これが簡単ですけども、シンプルな受容と言われるけれど、決してイージーではありません。

ですから、図に書いてあるように、イメージ的に相手、そしてこちらがティーチャー、あるいは私としたら、相手の心臓に自分の心臓を重ね合わせるように聞く。決して、腰が引けて頭で「相手はどんなやつや」というのではなくて、逆に心臓を出すような気持ちで聞く。そうすると何かを感じてきます。何かを感じてきて、そして「うーん」とか「へえー」とか「はあー」とか「ああ、そうなんですか」と、つぶやくことが大変大事です。それは簡単のように見えるけれども、やはり訓練するといいいことです。

実は、学校の先生は結構うまいのです。ベテランの人は「はあ」、「ふう」、「ああ、そうですか」と言うこと。若い院生の人たちはいかな、それが下手なんです、「はあ」、「ふう」、「へえ」とか言うのは。感じていてもなかなか出ない。それを少し意識して、「へえー」、「ああ、なるほど」、「ああ、そうなんですか」と言えるようにする。学校の先生は、それはできているのですが、次にいろいろアドバイスしようとするので、できもしないアドバイスを嫌われてしまうわけなんです。まず最初はそれです。この辺を十分訓練して、心臓と心臓を重ね合わせるように、と。相手の話を本気で聞こうというときはそうしてもらえたら、ということです。

少し飛んでしまいましたが、次の裏のページの8の④「自分が気づかずに相手を傷つける」、これは覚えておいてもらえたらと。逆に、

作戦というのは変な話ですけども、私はちょうど中鹿先生と同級生ですが、私が助手のときにある院生が少し失敗してひどく落ち込んだときがある。そのとき私がいつもその人を見るたびに、「ドンマイ、ドンマイ」、「平気、平気」とか、「頑張れよ」とずっと励ますんです。そうすると、数カ月してその人が怒り出しましてね。初めは、「山下さん、とってもうれしかった、励ましてもうて」と。それが、「自分の顔を見るたびに、元気出せよとか、頑張れよ、とか言われるとだんだん腹立ってきます」と。ついに「きょうは正直に言います」と言って…。「ああ、しまった」と思いましたね。私はもう、いつの間にか、後輩思いのいい人でこう言った。「頑張れよ」とか何とかと言っているだけけれど、言われているほうにしたら、できもしないことを親切ごかしに言われるのは非常につらいですね。自分はこれをやりたいんだけど、今できない。それを人から「頑張ってるね」とか何とか言われると非常につらい、ということです。

しかし、ここに書いてあるように、自分が気づかずに、今は後輩がついに怒って言ってくれたから私も大変反省しましたが、意外とやっているかもしれないですね。ですので、これを使ってくれたらいいのが、例えば嫁・しゅうと問題で、おしゅうとさんがたばこをいっぱい吸っていて、しかし、たばこをやめようかなあと大変悩んでいるおしゅうとさんに「お父様、その一服が体に毒ですよ」とかね、親切ごかしにいつも言う、という。初めはおしゅうとさん、「何てうちの嫁はいい嫁や」と思っているけれど何かだんだん腹が立ってくる、というようなことです。そのようなおしゅうといじめというのか、使ってもらえたら…。

あるいは逆に、若い嫁いじめ、こちらも年配の方がおられるので、「ダイエットに気をつけて」など嫁が言っている場合は、「ミチコさん、その一口が豚になりますよ」とか、

「その一口が毒になりますよ」とね、親切ごかしに言う。それで怒る嫁は何だ、となるというようなこと。ただ、それは上下関係があるとき、そして人間関係を悪くしたいときに使えばいいけれども、よくしたいと思ったらやはりそれはまずいですよね、そういうようなことは。

実はこれを教師がやっていることがある。不登校の子に「元気出しや。あしたおいでや」と、つつつつつつ、毎日のように言うようなこと。それは、教師としていい教師のつもりでいるけれども、子供にとったら耐えられない。「あしたおいでや」とか、「あした大事なところやから、ちょっと無理だったらおいで。すごい無理だったらもう来んでもええけど」とか、勝負どころでおいでと言うのは大事ですが、いつも顔を合わせるたびに「おいで」「おいで」と言うのは実は傷つけていることに全然気づいていない。

脱線しました。戻りますと一ここまでは裏ののところを見て下さい—もう時間もありませんのでポイントだけいきます。振り子の原理で大体おさまって、そして心臓と心臓を重ね合わせるようにして聞いて、というところでもいいのですが、これを超えて、これだけではおさまらない保護者の方もいます。あるいは子供もいます。そのようなときの対応は、やはり教師集団として関わっていかなければいけないということです。

どのようなことかという、担任が標的になって、「確かにまずいことしたな、でも、そこまで怒らんでもええやろ」というようなとき、わあっと怒られる。そのとき、教師集団として大事なものは、「担任、おまえ、何へまやってんねん」ではなくて、「へましたかもしれないけども、ようそれに持ちこたえて、その後、保護者との対応を頑張ってる」というフォローが非常に大事です。それが一つ。

そして、もう一つは、保護者の中に、養護の先生やスクールカウンセラーに対してこち

らは「とってもいい人」、味方で「いい人」、こちらは「悪い人」、「かたき役」にして言うてくる場合があります。このときに大事なことは、お互いがけんかしないことです。保護者の方の心の一部をこちらは担当しているんだ、こちらは保護者の理想化されたところを担当しているんだと。私がスクールカウンセラーに行っているときに、その担任の先生と話していたのは、「もちろん先生のほうが大変ですけども、『いい役』というのもつらいものですよ」と。山下はいい人間とは違うのにもものすごく理想化されて、すごくいい人と言われてしまう。いつ何どき奈落に落とされるかという心配がありますね、先生を見ていると。「いいです、いいです」というふうに言われて。それをつらいですよ。お互い、この保護者と子供のために仲よく頑張ってください、と連携をとれていることが非常に大事だと思います、学校現場でも。

ですので、教育相談というのは、部屋だけではなくて学校全体、あるいは家庭訪問やあらゆるところで行なうんだということ。それからもう一つは、1人でするのではなくて、もちろん1対1の場合もあるけれども、1対1だけでなく、連携をとって教師集団として、あるいは場合によってはいろいろな他機関との連携も考えて取り組んでいかなければいけない、ということです。

こんなとき、いろいろ難しいタイミングがある。保護者が一保護者の気持ちになればそのとおりののですが一操作しようとする場合があります。「先生、あれしてください、これしてください」と。そのときに、話は聞けるけれど、先程言いましたように「言いなりにはならん」と。そして、だれかもう1人、教頭クラスが来てくれて、現実問題で少し言ってもらえたら非常にありがたいです。「養護の先生からこうこう聞きましたけども、それから担任から聞きましたけど、これこれはお母さん、お父さん、こういうことでここまで

はできますけど、これこれではできません」とか、そのような一言を言う人と集団で関わる。

それで、言いましたように、子供と保護者のために一生懸命やる。心臓と心臓を重ね合わせるという基本さえ持っていれば、初めは「何や教師は」と思われるかもしれないけれど、必ずそういうのが伝わる。保護者も、「先生、よう考えてくれてる」。一緒によく考えるというより、感じてくれているということでしょうね。自分の気持ちになって考えようとしてくれている、というところで連携できていくと思います。

では、まだ少しあるんですけど、中心的なところは話しましたので、私の話はこれで終わりたいと思います。どうもご清聴ありがとうございました。(拍手)

(了)

(注)

上記は、2009年1月10日(土)に、追手門学院大学において開催された、地域支援心理研究センター公開シンポジウム「学校における教育相談のあり方—カウンセリング・マインドを生かすために—」の基調講演を基に作成した。